



Youth Symposium 2013

ユースシンポジウム 2013

若者がいま／ 未来を語る ユースセッション

”対話“ で盛り上がる若者たち

9月29日(日)、14回目となるユースシンポジウム2013が中京青少年活動センターに、200名近い参加者を集めて、開催されました。今年度は「若者がいま／未来を語るユースセッション」というテーマで1部、2部を通じ、若者自身が等身大の「自分」をそれぞれの手法で語り、表現し、発信する場として位置付けました。そこから多様な若者の姿があふりだされ、語り手である若者自身の「いま」に新たな意味づけが生まれました。

パネリスト ● 松本浩美さん(NPO法人Homedoor 事務局長)

滋野正道さん(ヤマカミ計画代表)

井上 栞さん(シチズンシップ共育企画学生スタッフ)

上原大吾さん(フレゼン龍実行委員会代表)

コーディネーター ● 深尾昌峰さん(NPO法人きょうとNPOセンター 常務理事)

第1部の全体トークセッションでは「若者が社会とつながる瞬間」と題し、若者のパネリスト4人が、深尾コーディネーターから与えられた「スイッチ」というキーワードをもとに、それぞれ自分語りをしました。

松本さんは小学校時代のいじめ経験から「変わりたい」と思った中学校時代に、ボランティア部で出会った釜ヶ崎のホームレスのおっちゃんたちの衝撃的な姿。滋野さんは「夢がない」「モラトリアム」という言葉を多用しながらも「今の自分に正直に生きる」こと。井上さんからはインドの福祉施設でのボランティア経験やある女の子との出会いから「社会」を意識したこと。上原さんは大学浪人時代の仲間と、大学入学後に出会った友人との間にギャップを感じ、そこから始まった葛藤や生きる意味探しについて話

されました。

最後に深尾コーディネーターが、「変人」というキーワードで「社会を変えていく人」に触れ、「若い人たちの感性や、生きづらさ・ネガティブをはねかえす力の中に社会全体のつくりかたのヒントがあるのではないか」「社会が若者を孤立させず、一緒に取り組んでいく多世代の存在が必要ではないか」という問いを提起されました。

セッション終了後、参加者から「初めはキラキラした若者たちが話をする内容だと思ったが、さまざま葛藤を抱えながらも目標をもって活動していることがわかり共感できた」という同年代の若者や「若い人たちの活動実践を聞いて心が洗われた。私なりに社会の役に立ちたい」といった70代の声を聞くことができました。

(中京青少年活動センター・ユースワーカー 竹田明子)

トークフリマ バラエティに富んだ熱い対話

(伏見青少年活動センター・ユースワーカー 青木 理紗)

トークフリマは若者が本気で語る魂の「1日Session」には、21の団体が出店しました。国際・環境・NPO・学習支援・セクシュアルヘルス・福祉・被災地支援・大学自治会・社会企業家など、大変バラエティーに富んでいました。

トークフリマとは、出店者がホスト役となり、商品としてトークを提供します。来場者は自由にブースを回り、気になるところでトークを聴く。机とイスがあったり、カーペットを敷いて地べたに座ったりと、トークスタイルもまちまちで、来場者とホストが意見を交換しました。

「活動紹介をするイベントはたくさんあるけど、自分の想いを伝える場は少ない」という学生の声に後押しされ、今回の企画は実現しました。脱サラしてレストランを立ち上げ日替わり店長制を敷いた「魔法にかかったロバ」、アフリカの子どもたちを支援する学生国際協力団体CWSのメンバーによる「そこで感じた疑問」の提起、10代の若者が担う東北復興支援を熱く語る「ティーンフォア3・11関西支部」など対話を軸に活動や社会への思いを存分に発信していました。

2つの会場に分かれましたが、どちらも賑やかで熱気に包まれるなか、多くの若者が本気で語り合う姿に、主催者側にも強く伝わるものがありました。また、「これだけ真剣に自分のことや想いを伝えられる若者に出会えてよかった」との、来場者の一言も。これからも想いを語りたり対話をしたり交流ができる場づくりを通じて、若者が輝ける機会をプロデュースし続けたいと思いました。



参加者の声

- タンザニアのストリートチルドレンにアプローチしている団体があることにとても驚き、感動しました！
- 何のためにエコロジーするのかとか、エコロジーしてどうやって幸せになるの...とか非常に大事だなと感じます。これから私たちどーすんの？
- グチをまったく他人の第3者に聞いてもらえてとてもスッキリしました！！
- ありがとう。自分の支えになったし、元氣エネルギーをいただいた。

ブースコーナー 多彩に若者を呼び込む

14団体の若者が出展、ブース同士の交流も見られました。「クラブ・アトラクション」は大きな壁紙を使って自由に質問や意見を書かせ、参加者同士の新しいつながりを広げようという試みを、「ゲチコレ」はたまった愚痴を存分に語れる場を提供。「劇団しようよ」は会場ロビーを使って、お笑い芸人のような路上パフォーマンスを実施、来場者の笑いを呼んでいました。

(南青少年活動センター・ユースワーカー 横関つかさ)



交流会 出合いを力に

第1部の全体トークセッションから午後のトークフリマやブースコーナー、セミナーの参加者、一般来場者ら約1000人が集まり、活動を終えてホッとしたりと時、自由に意見交換などが行われました。参加者からは「こういう形でさまざまな活動をしている若者が集まり、話ができる機会はなかなかないので、いい体験になった。また来年も開催してほしい」という声も聞かれました。終始、和やかなムードでユースシンポジウム2013を締めくくることができました。

(東山青少年活動センター・ユースワーカー 羽田野 侑依子)



セミナー 発達障害を知る機会に

思春期から大人へ若者がいまを語るを主題に、発達障害者支援センター「かがやき」の岩井栄一郎氏が、発達障害を取り巻く現況を具体的に語られ、少数派の障がい者が生きやすいよう社会的な工夫が大事と強調されました。続いて発達障害を持つ若者が、大人へと成長する過程で感じたさまざまな思いをリアルに話し、参加者にインパクトを与えました。セミナーの意図する「より多くの人に発達障害を理解してもらおう」機会を増やしていきたいものです。

(中京青少年活動センター・チーフユースワーカー 村井繁光)

若者たちに明日の社会を期待する ——ユースシンポジウムをふり返って

龍谷大学政策学部准教授 深尾 昌峰

今回のユースシンポジウムでは、社会と正面から向き合おうとしている若者たちがたくさん集まっています。熱意がありました。それも、何か派手なことを実現してやろうということではなく、等身大の挑戦をしている若者たちです。私は、第I部「全体トークセッション」の司会をしていましたが、壇上にいたパネリストたちは何ら特別な存在ではなく、むしろフロアのたくさんの若者たちとの間に一体感ができていました。将来の就職を心配する親との関係を気にしていたり、活動にかかるお金の工面に苦心していたりと、みんな共通の若者らしい悩みを持っていました。今の若者たちは、SNSなどの新たなツールに恵まれ、シェアすることが得意な世代です。学生団体やNPOの絶対的な数も増えていくように感じますし、相互のつながりやネットワークがどんどんできています。若者の社会参加の裾野が広がっていることを実感しています。

一方、若者政策では、労働市場を通じた社会参加が推進されています。しかし、いま労働市場はどんどん流動性を増大させています。特に若者にとっては非正規雇用が当たり前の時代になり、使い古しの働き方が広がっています。モデルなき時代、将来を見通しにくい世の中で、従来型のシステムを前提とした発想が早晩立ち行かなくなることは明白です。ただし、労働市場への参加と市民社会への参加を二分法的に捉えるのではなく、若者たちが自分の経験の活かす方チャンネルを多彩にイメージできることが大切だと思っています。彼らは「ゆとり世代」などと一括りにされることも多いですが、裏を返せば、自分たちの頭でしっかりと考えることを教えられてきた世代でもあります。私は、これまでのモデルにとらわれていない若者たちこそが、社会を豊かにつくり変えていけると信じています。

聞き手

山科青少年活動センター
ユースワーカー 上原 裕介

■ プロフィール

深尾 昌峰 (ふかお まさたか)
専門は非営利組織論。公益財団法人京都地域創造基金理事長、公益財団法人京都市ユースサービス協会評議員会会長も務める。

